平成２５年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文
高等学校の部　最優秀賞

一歩踏み出す勇気を

福島県立磐城高等学校
１年　長島　智里

「ペンと本を手にとろう。それこそが最強の武器だ。」

そう訴える少女から私は目が離せなかった。彼女の名前は、マララ・ユスフザイ。昨年１０月に武装勢力の銃撃を受けてもなお、女子教育の発展と世界平和を目標に活動を続ける、勇気ある少女だ。しかし、いつもなら「遠い国で起きている問題」として片付けてしまいがちな私がマララさんから目が離せなかったのは、命を狙われても活動を続けるマララさんの姿に感動したからだけではない。マララさんが私と同じ、１６歳だったからだ。自分と同じ年の人が命をかけてでも変えたい現状がそこにはある。そう思うと、女子教育問題を単なる他人事ですませてはいけない。そんな気がした。

世界には、様々な理由で教育を受けられない子どもたちがいる。戦争や紛争が続いている、学校がない、親がいない・・・。その中で、私が今まで知らなかったものがある。それが「女の子だから。」

女の子は早く結婚して、家事をするもの。発展途上国の中には、そういった男女の役割を分ける伝統的な慣習や差別が根強い。それ故、男の子が学校へ行っている間、水くみや食事の準備、兄弟の世話などに追われ、教育を受けられない女の子は少なくない。事実、学校に通えない女の子の数は男の子より３００万人も多く、世界で読み書きできない人の３分の２が、女性であると言われているのだ。

しかし、今でこそ想像もつかないような現実だが、歴史を振り返ると、日本も同じような道をたどってきた。

１８７２年に学制が発布され、身分や男女の別なく共通教育が行われることになった日本。しかし実際は、普遍的な知識を効率的に伝達しようとする男女共通の学校教育は、なかなか受け入れられなかった。特に日本の場合でも女子就学率は伸び悩んだ。主な理由としては、子守、貧困、女子教育への理解が得られない、などで現在の発展途上国の状況と変わらなかったのである。

しかし、明治政府は女子教育の大切さを理解していた。他国への調査で、国力のある国は女子教育も盛んで、女性も国家の問題に関心を持ち、見聞が広いことを知っていたのだ。

そうして、政府は１８８０年、全国に子守学校の設置を命じた。子守学校とは、弟や妹

の子守や、他家での子守奉公をする児童だけを集めた学校のことである。そこで、幼児教育の傍ら普通教育を授けたのだ。

また、子守学校では親の女子教育への理解を得るために、教育内容も改められた。非日常的な科目だけでなく、日常に役立つ家事や育児、裁縫などの授業が組み込まれた。

そうした努力が実り、明治時代の末、ようやく女子就学率が男子に追いつき、現在では世界屈指の経済大国へと発展したのだ。

このことから、発展途上国においても、子守学校を採用してはどうだろうか。幼児教育と同時に普通教育が受けられるなんて、まさに一石二鳥だと私は思う。また、教育内容に生活に役立つ科目を取り入れることによって、親の教育への理解が深まるかもしれない。

加えて、子守学校が保健・衛生環境の改善につながる場になることも期待できる。将来母親になるであろう女の子達に、病気や母子保健などの正確な情報を伝えられれば、発展途上国が抱える保健・衛生問題解決の日も、ぐっと近づくだろう。

だが、子守学校には根本的な問題点もある。それは子守という児童労働を前提とした上で存在しているという点だ。全く教育を受けられなかった子どもにとって、子守学校での学習は、とても意味のあるものになるに違いない。けれども本来、学齢児童は労働によって学びを妨げられてはならず、子守学校の存在で、逆に児童労働を肯定するようなことにはなってはならないのだ。子守学校の設置により、女子教育の基礎をつくり、将来的にはすべての男女がともに学べる場を。これが私の理想であり、願いである。

では、その理想の実現には何が必要なのだろう。それは、「勇気」だと私は思う。

マララさんの、国連での演説の中で私が今でも心の残っている言葉がある。「銃弾で人を黙らせることはできない。」という言葉だ。

わずか１５歳の少女を狙った凶悪な事件。マララさんは頭部と首に２発も銃弾を受けた。しかし彼女は負けなかった。そして力強くこう言った。「事件で私から弱さと絶望が消え、力と勇気が生まれた。」と。

私がマララさんの立場だったらどうしていただろう。きっと彼女と同じことは私にはできないだろうなと思う。

私のまわりには、マララさんのように命をかけてでも変えたいものはない。日本は平和で経済的にも豊かで、世界的に見ても、とても恵まれた環境の中で、私たちは生きている。けれども、だからといって「今」という同じ時間を厳しい状況で生きている発展途上国の人達のことを、自分達とは関係ないと思ってはいけないと思う。私たちにも豊かな環境という膜を破り、世界へ目を向ける「勇気」が必要なのだ。

たったひとりの力で世界なんて変わらない。私が何をしたからといって変えられるものなんてない。私は今までそう思っていた。しかしマララさんの姿を見て気づかされた。誰かが変えようとしない限り、今とは何も変わっていかないということを。

私もマララさんのように、自分の信念を貫き通す、勇気ある人になりたい。高校生の私にできることは、世界に目を向け現状を知る、だだそれだけのことにすぎないかもしれない。しかし、行動を起こさなければ進歩も発展もない。だから私は、マララさんが教えてくれた勇気を胸に、一歩踏み出してみようと思う。いつか世界が変わる日がくると信じて。